

リスク回避の円高、持続と反動修正にらむ

新変異株、FRB幹部発言、各国指標、原油など焦点

今週の為替相場は前週からのリスク回避による全般的な円高・外貨安について、持続性と反動修正をにらんだ展開が想定される。週間予想はドル/円が112.80-114.80円、ユーロ/円は127.50-129.20円。前週後半からはコロナ新変異株の感染拡大懸念が、世界的な株安と原油安、円高を加速させている。今週は新変異株の動向のほか、米FRB幹部発言、米欧中などの経済指標、米-イラン核協議や主要産油国の会合を踏まえた原油相場の行方、月末の為替需給などが注目される。

新変異株に一喜一憂、FRB金融政策への影響も焦点

今週の為替相場で注目されるのは、前週に南アフリカで確認された新型コロナウイルスの新たな変異株「オミクロン株」を巡る動きだ。新変異株の動向に一喜一憂となる不安定さも警戒される。

新変異株について英国のジャビド保健相は、「デルタ株などよりも感染力が強い上、今のワクチンも効きにくい可能性がある」と強い懸念を示した。今週以降、新変異株の世界的な感染拡大や病状の深刻化、各国での経済制限の再強化などが見られると、改めて世界的な株安や原油などの資源相場下落が持続されやすい。リスク回避の円高圧力が持続するほか、資源国通貨の下落（南アフリカ・ランド、カナダ・ドル、メキシコ・ペソ、豪ドル、NZドルなど）が後押しされる。

同時に米国債市場では、安全逃避の米国債シフトや米FRBによる利上げ前倒し観測の後退などで、米国債価格の上昇と米国債金利の低下へと作用する。対円やユーロ、スイス・フランなどでは、ドルの下落材料となり得る。

一方で新変異株に対しては、各国で昨年以降の教訓を踏まえた迅速な水際対策などの危機管理策が講じられている。また、28日には南ア政府のワクチン諮問委員会・委員長が、「南アで入院患者は特に増加していない」、「これまでの感染症例を見ると、症状はどれも軽度または軽度から中程度となっており、良い兆候」とコメントした。

同じ28日には米製薬大手モデルナの幹部が、「既存のワクチンが防御を提供する能力については、向こう数週間以内に分かる」、「全く新しいワクチンを作成しなければならなくなる場合、2022年初めには大量に供給できる」といった見通しを示している。こうした前向きなニュースが目立ってくると、過度な悲観論が一服。世界株高と資源高、全般的な円安、資源国通貨高、対円やユーロ、スイス・フランなどでのドル再上昇を促す可能性も無視できない。

新変異株については、米FRBの金融政策に与える影響が注目される。今週以降、FRB幹部の発言で新変異株への懸念が強調されると、量的緩和縮小や先行き利上げへの「慎重化」思惑につながり、米国債金利の低下とドル安を促す。

ただし、感染懸念の再拡大は、改めて米国で供給・物流制約や品不足、人手不足を助長させてしまう。またぞろインフレの上昇要因となるため、FRBはそう簡単に緩和見直し姿勢を緩めることは出来ない。その意味でFRB幹部は「当面は新変異株の影響を見極める」と注意を払いつつも、基本的な緩和見直しスタンスは

堅持させる可能性がある。その場合、米国債金利の下限切り上がり、ドルの下限切り上がり支援されそう。

新変異株のリスクが浮上してきた26日、米アトランタ連銀のボスティック総裁は、新変異株が米国経済に及ぼすリスクを重大視しない姿勢を示し、インフレ抑制に向けて、資産購入の縮小ペースを加速することにオープンだと述べた。同氏は「新変異株がデルタ株と同じような軌道をたどるとすれば、多少の減速は見られるだろうが、デルタ株の際に見られたほどではないはずだ」と指摘。「現在の米国経済には大きな勢いがある。どのような結果になろうとも、この勢いで次の感染波を乗り越えることができる」と語った。今週以降、その他のFRB幹部からも似たような考えが示されると、米国債金利の上昇とドル高が後押しされる。その他の注目ポイントは以下の通り。

<VIXはギャップ開けて急上昇、窓埋め低下の余地>

米国株は前週末26日、コロナ新変異株の懸念で大幅安となった。その中でリスク回避の尺度であり、米株投資家の不安心理を映すシカゴ・オプション取引所(CBOE)のボラティリティー・インデックス(VIX指数)は急上昇となり、一時28.99と3月以来の高水準に跳ね上がっている(リスク回避)。

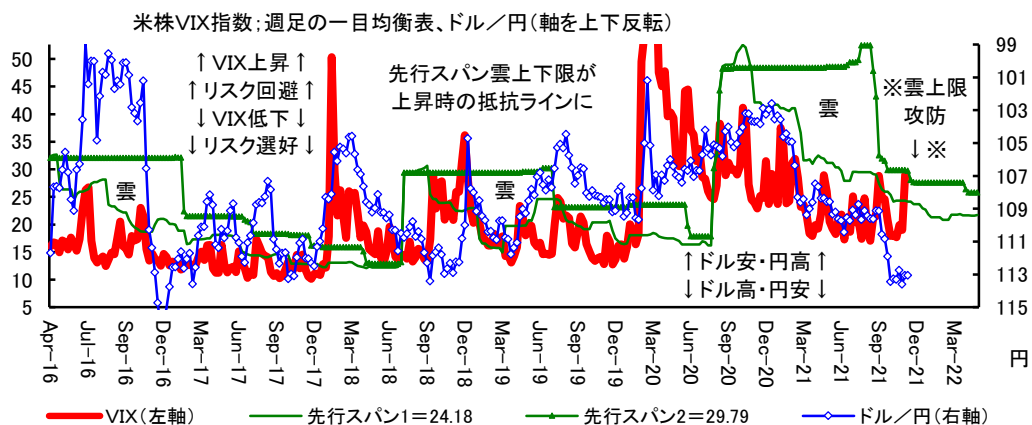
しかし、VIX指数の日足テクニカルでは、急上昇の前である前営業日24日の日中最高が20.96、終値が18.58となっていた。そこから26日は寄り付きが26.62と急上昇でスタート。日中最低も23.88で下げ渋っている。結果、前営業日の最高20.96からは、上方向に大きな隙間(ギャップ、窓)を開けての急上昇となっている。前営業日の日中最高20.96から、26日の日中最低23.88にかけては真空のギャップが残された状態だ。短期的にはそのギャップを埋めに行く「窓埋め調整」のVIX低下の余地を秘めている。その場合は米株高と、リスク回避一服による円安・外貨高へと振れやすい。

また、VIXの週足テクニカルでは、一目均衡表チャートでの重要な抵抗ラインである先行スパンの雲上限が29.79、雲下限が24.18に位置している(今週12月3日週の時点)。前週末26日の日中最高が28.62であり、現状は雲上限29.79で上昇がブロックされている構図だ。

2016年から直近5年の過去実績として、コロナ危機直後の昨年3月という特殊事例を除くと、雲の下限と上限は重要な上限抵抗ラインの壁となってきた。その意味で今回も「再度の雲上限トライ」というVIX再上昇のリスク回避余地は残りつつも、雲上限でのVIXの頭打ちから低下、米株の再上昇、円安やドル高の再開(米株やドルの押し目買い)といった流れが注視される。

<米欧中の経済指標>

今週の米欧中では、最新11月分のPMIやISMといった景況感指数が相次ぐ。米国では3日に雇用統計も予定されているが、米国では経済活動再開の広がりや年末商戦の前倒し始動などが各種指標の下支え要因となりやすい。中国に関しても、不動産過熱抑制策の緩和や景気下支え策などが支援材料となる。一方で欧州に関



しては、コロナ感染の再増加や天然ガスなどの資源エネルギー高騰が重石となる。

＜原油反落、今後の動向が円や資源国通貨を左右＞

為替相場では8月後半以降、ドル/円とクロス円で円安・外貨高が進展してきたが、一因としては「原油相場の上昇」があった。しかし、WTI原油先物は10月25日の1バレル＝85ドル超えをピークとして、上昇一服から反落に転じている。前週末にはコロナ新変異株の懸念が、原油安を後押しさせた。

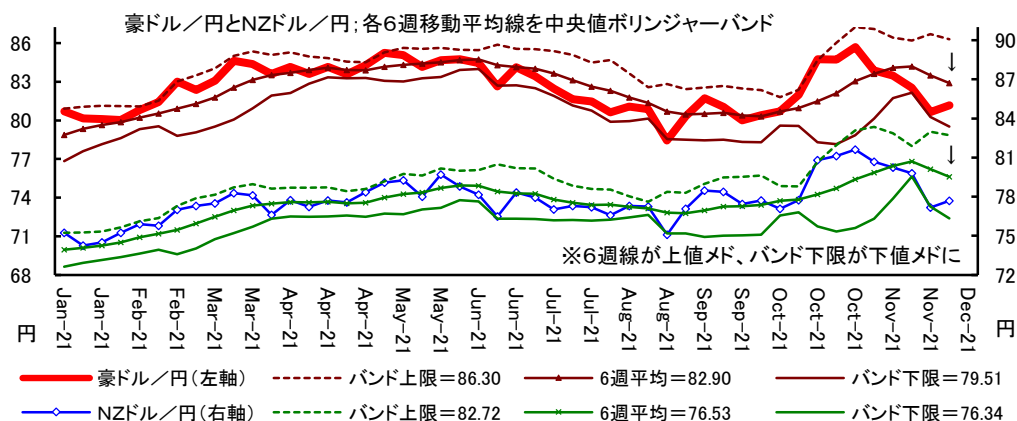
原油の調整下落は、資源国通貨の下落（南アフリカ・ランド、カナダ・ドル、メキシコ・ペソ、豪ドル、NZドルなどの下落）やクロス円で円高・外貨安の要因となりやすい。反対に原油相場が下げ渋りから再上昇になると、改めて全般的な円安・外貨高が後押しされる。

今週は米国とイランが29日、イラン核合意の正常化に向けた間接協議をウィーンで再開する。現状は難航が予想されており、イラン原油輸出制裁の持続（原油供給抑制）や中東の緊張懸念などが原油高の材料となる。反対に先行き歩み寄りの兆候が出てくると、イラン原油輸出の制裁緩和が意識され、思わぬ原油安を招く可能性も無視できない。

また、石油輸出国機構（OPEC）と非加盟産油国でつくる「OPECプラス」は、11月29－30日に予定していた会合を12月1－2日に延期して開催する。新変異株が原油の需要と価格にどう影響を及ぼすか見極めるためだが、従来から主要産油国はコロナ打撃の長期化などで、世界の原油需要回復に悲観的な見通しを示してきた。それが増産の慎重姿勢となっており、改めて増産の見送りや慎重さ持続が示されると、原油安の材料となっていく。

＜クロス円の週足、6週線が上値抵抗線に＞

為替相場の中長期トレンド判断で、参考になるのが週足テクニカルだ。主要クロス円取引の週足では6週移動平均線を各外貨が下回り（円は上昇）、現状は6週線などが上値抵抗線となっている。6週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンドでは、6週線からの下抜け状態が続く限り、6週線を上値メドとした外貨の戻り売り圧力と、バンド下限方向への外貨安が意識される。反対に6週線を上抜け回復できると、外貨の下落リスクが一服。バンド上限方向が、週足ベースでの上値メドとして視界に入っていく。6週線を下値メドとした外貨の押し目買いと、下限切り上がりトレンドへの回帰が見込まれる。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。